

**「階級」という問題の来歴：
資料リスト 00年代から現在**



生・労働・運動ネット 富山

「階級」という問題の来歴 — 資料リスト — 00年代から現在

生・労働・運動ネット 富山

『階級』という問題の来歴

資料リスト 〈前註〉

かつてこの列島の「運動圏」を主導し、駆動させてきた『階級』（にかかわる）言説が「行方不明」になってすでに久しい。あたかも「死語」と化したかのようにみえながら、「死亡宣告」が自明のものではないかぎりにおいて、「行方不明」と言うべきなのだろう。

ここではその間の事情をトレースする余裕も力量もなく、とりあえずこの約50年ほどを簡単に振り返ってみよう。

●いわゆる〈68年〉の波がこの列島の「運動圏」を洗い、それまでの『階級』言説とそれに依拠してきた社会運動の「古典的な範型」が次第にその波間に浮き沈みしはじめ、70年代に入って「運動圏」が〈68年〉によって喚起された諸社会運動群によって占められるにしたがって、「古典的

範型」の解体は著しく、それはあたかも「神殿」に「奉納」されたかのような様相を呈するにいたる。

他方でそれら諸社会運動群は、「新しい社会運動」と呼ばれたりもしながら、個々の道行きをたどり、時折『階級』言説（の行方不明）を代位するかのような思考作語が、海の向こうのものを含めて試みられましたが、その試みは「空虚なシニフィアン」として浮遊するいがないかのようなものだった。しかし、この列島に伝来するのは80年代のはじめではあったが、海の向こうでは、いわば例外的であったにせよ、イタリヤのように〈68年〉が77年にまで持続・展開され、その過程で『階級』言説が更新され、社会運動の「古典的範型」をのりこえる営みが展開されるということもまたあったのだ。

●そのような〈68年〉を「反（転する）革命」——それが70年代以降の世界のいわゆる「先進資本主義」とその国家群の至上命題となる。その命題のなかで、上でふれてきた『階級』言説の「行方不明」はまさに「反転」の武器に取

り込まれ、その言説の肉体的内実をなしてきた労働者階級はその武器によつて解体・包摂されて行く。その武器の先端を担ったものこそ「新自由主義」ネオリベリズムに他ならない。

70年代末以降、「ネオリベリズム」を尖兵として、資本主義のグローバル化はあたかも無人の野を行き、世界の果ての果てにいたるまで、人間存在の底の底にいたるまでを席卷するかのようにならざるを得ない。かつて『階級』言説がその成果ともし、それに依拠もしてきたいわゆる「社会主義圏」はその侵攻によつて浸食され、解体され、いわゆる「先進資本主義国家」におけるその相応・対応物であるとされてきた「福祉国家」も同様の道行きに追い込まれ、その核心にあたる「社会的なもの」は縮減につぐ縮減にさらされる。

こうして『階級』言説の「行方不明」は深まり、それは「死語」であるかのような様相は深まり行くかのようにみえた。しかし、『階級』言説を生起させてきた社会性の根柢の強度は、〈68年〉の「反転」の〈反転〉となつて現前化にむかう。その狼煙は先ず「ネオリベリズム」の「実験場」であるかのように扱われてきた中南米である。その狼煙はしだいにひろがり、99年、まさに20世紀末にアメリカ・シアトルに飛び火し、世紀をはさんで「反グローバルリズム」の〈声〉は世界に広がる。

●その端緒は80年代にあり、日本資本主義の異様な膨張のもとに地ならしがされてきたこの列島における「ネオリベリズム」の侵攻は「周回遅れ」で90年代半ばから展開さ

れるが、それは「周回遅れ」であるが故に、また、『階級』言説の弱さの帰結でもある「福祉国家」、「社会的なもの」の脆弱さから、きわめて激烈に短期間で進行する。そのことに真つ正面から対峙したのが、酒井隆史・渋谷望さんらの営みであり、その後のこの列島の社会運動にとつて大きな指標となる。

この列島における、とりわけ若年層における「働く／働けない／働かない」をめぐる抗争・係争・交渉は、80年代における「学校」をめぐる「行く／行けない／行かない」のそれと重なりつつ、「失われた10年」の間に累積されてきた「寄せ場」の解体がもたらす「野宿者」をめぐる「他称／自称」とともに、「フリーター」をめぐる「他称／自称」の抗争が浮上する。

「寄せ場」における「日雇労働者」運動の系譜にたつて、2000年前後にこうした状況に向き合おうと『階級』という問題を喚起したのが、平井玄さんの一連の思考・試行であり、そのいわば対極で、『階級』言説の系譜の吟味を重ねていわゆる「労働力商品」の「運動」(の『無理』)の解明にたつて「労働者階級」の「他称／自称」を問題化してきたのが、長原豊さんの思考・試行である。この両者は、その後現在にいたるまで、この列島における『階級』という問題のいわばペースセッターである。矢部史郎・山の手緑さんらの営みも、それらと並走する。

●この列島社会における「ネオリベリズム」／「資本主義のグローバル化」の激烈な展開は、社会に大きな亀裂をもたらし、亀裂に落とされる「野宿者」は急増し、「不安

定雇用」にさらされる数多くの「ワーキングプア」を生みだし、「社会の貧困」は「貧困の社会」へと累積されつつあることが顕わになり、いわゆる「リーマンショック」は、それを加速化する。

2000年代に入って、上でふれた『階級』言説の空位は欧米経由の「社会保障・福祉」の言説、とりわけ「社会的排除／社会的包摂」言説によって占められはじめ、「ネオリベリズム」によるそのたぐみな反転、その固有の「自己責任」言説との表裏一体化は、「社会保障・福祉」においていわゆる「セーフティネット」の脆弱を補完する「格差」／「支援」なる「政策」言説の濫用をもたらす。かつて『階級』言説の重要な要素をなしてきた『平等』言説は見る影もないかのように「お蔵入り」し、「ナショナルセキュリティ（国家安全保障）」・「パブリックセキュリティ（治安対策）」の亢進と反比例して「ソーシャルセキュリティ（社会保障）」の縮減は著しいものとなる。ここでは「階級的不平等」が「格差」に、「階級的生殺し」が「支援」にいと滑らかに置き換えられていく。

そうした攻撃にたいする反撃が、2005年前後から、一方での「反貧困運動」の拡大、他方でのすでにふれた「働く／働けない／働かない」のゆれを生と労働との相互重層化の反転の契機として捉え出す『生・労働・運動』とでもいえるべき「フリーター」の生存Ⅱ労働（組合）運動の叢生によって推し進められていき、「生きさせろ！」という〈声〉が路上にこだました。後者については、そのスタート時点からその個性を見定めようとする橋口昌治さんの営み、それらの運動の担い手の発言が貴重である。

また、それらの動向を2000年前後からの営みの延長線で『階級』の問題として受けとめ、提起したのが平井玄さんの「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」であり、長原豊さんの継続する営み、とりわけ「Senza Casa ヤサグレたちの街頭」である。また、それらの『生・労働・運動』群の担い手とかかわって、ヨーロッパ経由の「プレカリアート」という「自称」が浮上し、「フリーター」という「自称」と相補い合った。——なお、ここで触れる余裕はないが、「第23次」から15年後の2008年に「第24次釜ヶ崎暴動」があったことを、銘記しておきたい。

●それら『生・労働・運動』群の粘り強い闘いは、一方で「イラク反戦」運動、99年のシアトル以降の「反グローバルイズム」運動との連動を通して、他方でその多様な「労働現場」での果敢な抗争・「交渉」の積み重ねをへて、「内実をもつたシニフィアン」としての「フリーター」という「自称」は、地に足を着けたものになっていく。ただ、その過程で崔真碩・小野俊彦さんの間で相互Ⅱ提起された「フリーター運動におけるアジア的抗争」という問題は、「労働現場」の経験の累積にたったアンサーとしてはなお未決であり、進行する「移住外国人労働者」の多様化・多数化はそれに『階級』という問題」として向き合うことを必死の課題としてうながしている。

その多様化・多数化がその波頭とでもいえるべきものとなつている「リーマンショック」後の資本主義とその国家の反転攻勢は「金融資本主義」と「緊縮国家」として現前しており、資本主義はすでにふれた〈68年〉の反転、「社

会の全工場化」の闘をこえて、「社会の全緊縮化」とでもいべきものを推し進め、私・たちの身体を「植民地」化された「奴隷」として「収奪」するものとなっている。

2011年ユーロの「緊縮」政策の強圧に抗するギリシャ・スペインの闘いから始まり、アメリカの「ウォール街占拠」へと連鎖した、いわゆる「オキユパイ」運動」は、アメリカで多様な人々が表現した「99・1」という声への多くの共鳴をよんだが、その一巡後、さらに世界各地でいわば古典的な『階級』言説の復活・再生となって展開されている。しかし他方で、今こそその「99」をさらに割り、「99」に走っている亀裂を下方から押し開き、社会の下方でその根底を担いながら、様々な「他称」を負わされて最底に押し詰められてきた者たちが自らを『階級』へと『構成』し、〈アンダークラス〉を「自称」する時なのだという声もまた挙げられている。

なお、ここでその声にふれる前に、すでにアメリカを中心として「社会学」において使われていた「アンダークラス」という概念が、「ネオリベラリズム」の侵攻のなかで「非・反社会的行動様式」に向けられる「我々」と「彼ら」を区分する道徳性をおびた呼称となってきたことに、00年代に入つてすでにふれた酒井隆史さんが注意を喚起していたことを想起しておこう（この点については、『リスト』の2005年の堅田香緒里さんの検討を参照）。

また、そうした注意・検討をふまえ、さらに「アンダークラス」言説の狭隘性をこえようとその後欧米で拡がった「社会的排除・社会的包摂」言説とともに、すでにふれたように「政策」言説において今日に到るまで濫用されてい

る「格差」という言説が、誰の目にもあきらかな社会にはする「亀裂」・「分断」が『階級』の問題として浮上することを阻んでいることを、篠原雅武さんが指摘していたことを忘れないようにしたい。さらに篠原雅武さんは、その「亀裂」・「分断」にしたがって一方で拡大する「ポストモダンのスラム空間」について、他方ですでに平井玄さんが指摘していた（『リスト』の2006年の「北関東ノクターン」参照）「なにか腐ったものの噴出」について、いわゆる「ヤミ金」という暴力ネットワーク」による「下流喰い」にふれて、「見放された空間における暴力と安楽な空間の予防的抗的暴力」という問題を鋭く捉えだしている。そして、「都市貧民を犯罪者として分類することは自己実現的な予言であり、『街路』における終わりなき戦争という未来を形作ることを保証する」というH・デービスの言葉をひいている。

それから9年後の現在、その「終わりなき戦争」を「NOWAR, BUT UNDERCLASS WAR」として立ち上がらせることへ向けて、「自称」〈アンダークラス〉が現前しはじめる。

すでに上でふれたように、この列島社会における『階級』という問題」の2000年前後からペースSetterでありつづけた平井玄さんは、昨年はじめに、「アンダークラスの問い」として「Broken Japanへようこそ」という呼びかけを発している。今年の5月に、平井玄さんは、上でふれた『生・労働・運動』の一翼を果敢に担ってきた「フリーター全般労組」とともに、「自由と生存のメー

デー2016 アンダークラスの闘い」を進めている。またもうひとりのペースセッターの長原豊さんは、長年にわたる思考・営みを、昨年、「ヤサグレたちの街頭―瑕瑾存在の政治経済学批判 序説」として集成している。また他方で、すでに早くから中南米の「反ネオリベ運動」の解明・紹介を進めてきた廣瀬純さんが、「10年後の中南米」としてヨーロッパの「反緊縮運動」の分析とともに、77年にまでいたるイタリアの「68年」をラディカルにとらえかえした「オペライズモ」の系譜にたつて、すでに昨年「暴力階級とは何か」という問いをなげかけ、今年に入ってから「アンダークラスの『階級』構成とはなにか」という問いをあげつづけている。

こうして今この列島社会においても、社会の底から「横議・横行」して「アンダークラス」の「自称」を立ち上がらせ、「99:1」の「99」を断ち割り、その「1」を敵なる『階級』として現前化させることへむけて、久しく「行方不明」であった『階級』言説が「帰還」する時が「時熟」しつつあるのではないだろうか？

最後に以上をしめくくるにあたって、深い思索に基づく大きなインパクトに満ちた李珍景「不穏なるものたちの存在論」を挙げておきたい。

以下にリストアップしたのは、その「時」を拓く「武器」を準備するための手がかりのありかをしめすものである。

なお、今回、平井玄さんから、かつての「寄せ場」の緊張に満ちた闘いの記憶を思い起こしながら、現在の「階級」の問題を長い射程で捉えかえすことに向けた一文を、寄稿していただいた。多忙な中、私・たちの「資料リスト」のために力のこもった文章をお寄せいただいた平井さんに、改めてお礼を申し上げる。

「階級」という問題の来歴 — 資料リスト・00年代から現在

年	著者名・書名・論文タイトル	備考
1997	<p>特集 ストリート・カルチャー</p> <p>「新宿ダンボール村 闘いの記録」</p> <p>チュ・ドクハン、小倉虫太郎 「働かない権利をめぐるだめ連、韓国ペクスと語る」</p>	<p>現代思想 97年5月号</p> <p>発行：現代企画室</p> <p>「インパクション 第二三号」</p> <p>特集 当世プロレタリア事情 働かない権利 働く権利」所収</p>
1999	<p>小倉利丸 「いまあえてプロレタリアートにこだわってみる」</p> <p>崎山政毅 「闘いはこれから……ではないの？」</p> <p>平井玄・笠井和明 「労働のスペクタクル 都市雑業方歳」</p>	<p>同右</p> <p>「現代思想 00年5月号」所収</p>
2000	<p>平井玄 「フリーター階級をめぐる1〜3」</p> <p>長原豊 「論壇時評」</p> <p>平井玄 「甘く苦き新しいプロレタリアへ」</p> <p>酒井隆史+松本麻里 「Dialogue 階級闘争でクールになれ！」</p>	<p>「plan-B」サイト記事（投稿日：00年12月〜01年1月）</p> <p>「週刊読書人」（00年1月〜12月連載）</p> <p>「暴力と音 その政治的思考へ」（人文書院）所収</p>
2001	<p>長原豊 「階級とは何か？階級はどうなっていくのか？」</p>	<p>同右</p> <p>「文藝 01年春号」</p> <p>特集 いま、ここにある階級闘争」</p>

2001	平井玄 コメント・長原豊「ポストモダン・プロレタリアの闘争が始まる」 酒井隆史「自由論 現在性の系譜学」 矢部史郎・山の手緑「無産大衆神髄」	同前 発行：青土社 発行：河出書房新社
2002	「ネオリベリズム批判の小さな試み 「街頭が転成する」——街頭論研究会資料」	無党派クラブ・希望 パンプ
2003	渋谷望「魂の労働 ネオリベリズムの権力論」	発行：青土社
2005	渋谷望「万国のミドルクラス諸君、団結せよ!? アブジェクションと階級的無意識」 平井玄「亡霊的プロレタリア 永山則夫の子どもたちへ」	「現代思想 05年1月号 特集 フリーターとはだれか」所収
2005	渋谷望（聞き手）編集部「難民と階級問題」 矢部史郎（聞き手）山の手緑「新たな階級闘争とは何か」 杉田俊介「フリーターにとって「自由」とは何か」 平井玄「ミッキーマウスのプロレタリア宣言」 名取学「インタビュー 現代社会運動の経験 個人加盟ユニオンの現在、そして未来——青年ユニオンの経験から探る」 「フリーター・ニート——階級闘争の焦点」（栗原康・安藤丈将／堅田香緒里／篠原雅武）	「情況 05年3月号 特集 新たな階級闘争」 発行：人文書院
2005	「自由と生存のメーデー06——資本に殺されるな、生きろ！」	同右 発行：人文書院
2005	「フリーター・ニート——階級闘争の焦点」（栗原康・安藤丈将／堅田香緒里／篠原雅武）	発行：太田出版
2005	「ポリテイク 第10号」所収	「情況 05年10・11月合併号」
2005	「自由と生存のメーデー06——資本に殺されるな、生きろ！」	05年5月メーデー

2006	<p>平井玄「北関東ノクターン」</p> <p>矢部史郎・山の手緑「愛と暴力の現代思想」</p> <p>特集 「万国のプレカリアート！ 「共謀」せよ！」</p> <p>「自由と生存のメーデー06——プレカリアートの企みのために」</p> <p>雨宮処凛「生きさせろ！ 難民化する若者たち」</p> <p>「働けないわなワーキングマガジン フリーターズフリー Vol.1」</p> <p>摂津正「プレカリアート宣言」</p> <p>POINT「危険な階級の夜明け」</p> <p>長原豊「ヤサグレたちの街頭」<small>コミュニティズム</small></p> <p>篠原雅武「非正規性と戦争 抑圧の彼方における日常生活の行方」</p> <p>木下武男「格差社会にいどむユニオン 21世紀の労働運動」</p> <p>「自由と生存のメーデー07——プレカリアートの反攻」</p>	<p>「現代思想 06年2月臨時増刊号」 総特集 「フランス暴動 階級社会の行方」</p> <p>発行：青土社</p> <p>インパクション 第115号</p> <p>06年5月メーデー</p> <p>発行：太田出版</p> <p>編集・発行：有限責任事業組合フリーターズフリー 発売：人文書院</p> <p>「アナキズム 第9号」所収</p> <p>同右</p> <p>「現代思想 07年7月号」所収</p> <p>同右</p>
2007	<p>杉田俊介「無能力批評 労働と生存のエチカ」</p>	<p>発行：大月書店</p>
2008		

2008	<p>「フリーター労働運動座談会① 新たな社会運動としてのフリーターユニオン」</p> <p>「フリーター労働運動座談会② 苛酷な労働―「働かせろ」と「働かないぞ」の共存」</p> <p>「フリーター労働運動座談会③ もう一つの働き方―フリーターズフリーの試み・協同 組合・ワークシェアリング」</p> <p>阿部小涼＋鶴飼哲＋小田マサノリ＋海妻径子＋平井玄 ＋山口素明</p> <p>「討議 マルチチュードからコモンへ―貧・戦・共」</p> <p>山口素明×塩見孝也×三上治「プレカリアート運動・ 現在」と「60年代運動・経験」の対話」</p> <p>摂津正「新たな生の発明のために」</p> <p>「働けと叫ぶワーキングマガジン フリーターズ フリー Vol.2」</p> <p>栗原康「G8サミット体制とはなにか」</p> <p>「自由と生存のメーデー08―プレカリアートは増殖 ／連結する」</p>	<p>「人民新聞 1299号」掲載</p> <p>「同 1300号」掲載</p> <p>「同 1301号」掲載</p> <p>「現代思想 08年5月号」所収</p> <p>「状況 08年9月号」所収</p> <p>同右</p> <p>編集・発行：有限責任事業組合フリーターズフリー 発売：人文書院</p> <p>発行：以文社（16年に同社より増補・新版刊行）</p> <p>08年5月メーデー</p>
2009	<p>長原豊「プロレタリアート雑感」</p> <p>和田伸一郎「民衆にとって政治とは何か」</p>	<p>「現代思想 09年8月号」所収</p> <p>発行：人文書院</p>

2009	<p>小野俊彦「フリーター」から「民衆」へ——まだ見ぬわれわれへの生成法」</p> <p>山口素明・伊倉秀和・菅原秀宣</p> <p>「座談 今、労働の問題に向かうために」</p>	<p>「悍 第3号」所収</p>
2010	<p>「自由と生存のメーデー09——60億のプレカリアート」</p> <p>第3号刊行記念討論会「フリーターの敵とは誰か フリーター運動におけるアジア的抗争の可能性」</p> <p>小野俊彦・崔真碩「往復書簡 名乗りから始まるもの——異族たちの出会う広場はどこに」</p>	<p>09年5月メーデー</p>
2011	<p>「自由と生存のメーデー10——逆襲の棄民 パンドラの箱が開く」</p> <p>橋口昌治「若者の労働運動 「働かせろ」と「働かないぞ」の社会学」</p>	<p>「悍 第4号」所収</p>
2012	<p>「自由と生存のメーデー11——3・11／逃げる・つながる・追い詰める」</p> <p>小沼克之「就活ぶっこわせデモの総括と今後の抱負」</p> <p>SUGIMOTO = MORITA「イチゼロ年代の「学生運動」</p>	<p>11年5月メーデー</p>
2013	<p>「自由と生存のメーデー12——雑民の希望 てんでばらばらの声を響かせる」</p> <p>「日本寄せ場学会年報 寄せ場No. 26 特集「流動的下層労働者」再考」</p>	<p>「悍 第3号」所収</p> <p>「悍 第4号」所収</p> <p>「悍 第5号」所収</p> <p>「悍 第6号」所収</p> <p>「悍 第7号」所収</p> <p>「悍 第8号」所収</p> <p>「悍 第9号」所収</p> <p>「悍 第10号」所収</p> <p>「悍 第11号」所収</p> <p>「悍 第12号」所収</p> <p>「悍 第13号」所収</p> <p>「悍 第14号」所収</p> <p>「悍 第15号」所収</p> <p>「悍 第16号」所収</p> <p>「悍 第17号」所収</p> <p>「悍 第18号」所収</p> <p>「悍 第19号」所収</p> <p>「悍 第20号」所収</p> <p>「悍 第21号」所収</p> <p>「悍 第22号」所収</p> <p>「悍 第23号」所収</p> <p>「悍 第24号」所収</p> <p>「悍 第25号」所収</p> <p>「悍 第26号」所収</p> <p>「悍 第27号」所収</p> <p>「悍 第28号」所収</p> <p>「悍 第29号」所収</p> <p>「悍 第30号」所収</p> <p>「悍 第31号」所収</p> <p>「悍 第32号」所収</p> <p>「悍 第33号」所収</p> <p>「悍 第34号」所収</p> <p>「悍 第35号」所収</p> <p>「悍 第36号」所収</p> <p>「悍 第37号」所収</p> <p>「悍 第38号」所収</p> <p>「悍 第39号」所収</p> <p>「悍 第40号」所収</p> <p>「悍 第41号」所収</p> <p>「悍 第42号」所収</p> <p>「悍 第43号」所収</p> <p>「悍 第44号」所収</p> <p>「悍 第45号」所収</p> <p>「悍 第46号」所収</p> <p>「悍 第47号」所収</p> <p>「悍 第48号」所収</p> <p>「悍 第49号」所収</p> <p>「悍 第50号」所収</p> <p>「悍 第51号」所収</p> <p>「悍 第52号」所収</p> <p>「悍 第53号」所収</p> <p>「悍 第54号」所収</p> <p>「悍 第55号」所収</p> <p>「悍 第56号」所収</p> <p>「悍 第57号」所収</p> <p>「悍 第58号」所収</p> <p>「悍 第59号」所収</p> <p>「悍 第60号」所収</p> <p>「悍 第61号」所収</p> <p>「悍 第62号」所収</p> <p>「悍 第63号」所収</p> <p>「悍 第64号」所収</p> <p>「悍 第65号」所収</p> <p>「悍 第66号」所収</p> <p>「悍 第67号」所収</p> <p>「悍 第68号」所収</p> <p>「悍 第69号」所収</p> <p>「悍 第70号」所収</p> <p>「悍 第71号」所収</p> <p>「悍 第72号」所収</p> <p>「悍 第73号」所収</p> <p>「悍 第74号」所収</p> <p>「悍 第75号」所収</p> <p>「悍 第76号」所収</p> <p>「悍 第77号」所収</p> <p>「悍 第78号」所収</p> <p>「悍 第79号」所収</p> <p>「悍 第80号」所収</p> <p>「悍 第81号」所収</p> <p>「悍 第82号」所収</p> <p>「悍 第83号」所収</p> <p>「悍 第84号」所収</p> <p>「悍 第85号」所収</p> <p>「悍 第86号」所収</p> <p>「悍 第87号」所収</p> <p>「悍 第88号」所収</p> <p>「悍 第89号」所収</p> <p>「悍 第90号」所収</p> <p>「悍 第91号」所収</p> <p>「悍 第92号」所収</p> <p>「悍 第93号」所収</p> <p>「悍 第94号」所収</p> <p>「悍 第95号」所収</p> <p>「悍 第96号」所収</p> <p>「悍 第97号」所収</p> <p>「悍 第98号」所収</p> <p>「悍 第99号」所収</p> <p>「悍 第100号」所収</p>

2013	鼠研究会「暴動論のための12章」 栗原康「大杉栄 永遠のアナキズム」 「自由と生存のメーデー13——気をつけろ！雑民の敵がいる」	「HAPAX VOL.1」所収 発行：夜光社 13年5月メーデー
2014	HAPAX「われわれはスラムの戦争をつくりだす」 友常勉「流動的—下層—労働者」 エンドノーツ#3「待機経路 進行中の危機と2011—13年の階級闘争」 「日本寄せ場学会年報 寄せ場 No. 27 特集 「戦後70年 下層労働者の抵抗と系譜」」 「働けといわないワーキングマガジン フリーターズフリー Vol.3 (最終号)」 「自由と生存のメーデー14——ハラスメント化する労働社会を終わらせるために」	同右 同右 同右 発行：日本寄せ場学会 発売：れんが書房新社 編集・発行：有限責任事業組合フリーターズフリー 発売：人文書院 14年5月メーデー
2015	鼠研究会「どぶねずみたちのコミュニズム」 平井玄「Broken Japanへようこそ——導入と解題」 山口素明・布施えり子・田野新一・平井玄・大和田清香「座談会 「差別されること」が仕事—キャバクラユニオンの闘いからみえる非正規労働の現在」 廣瀬純「暴力階級とは何か 情勢下の政治哲学2011—2015」	「HAPAX VOL.4」所収 「季刊 ピープルズ・プラン No. 67 特集 資本主義 アンダークラスへの問いかけ」 同右 発行：航思社

	<p>長原豊「ヤサグレたちの街頭 瑕疵存在の政治経済学 批判 序説」</p> <p>李珍景「不穏なるものたちの存在論」</p> <p>廣瀬純「自由と創造のためのレッスン第40回 ポスト産業資本主義の労働運動へ」</p> <p>廣瀬純「自由と創造のためのレッスン第41回 ポスト産業資本主義の労働運動へ」</p> <p>栗原康「学生に賃金を」</p> <p>栗原康「はたらかないで、たらふく食べたい 「生の負債」からの解放宣言」</p> <p>栗原康「現代暴力論 「暴れる力」を取り戻す」</p> <p>栗原康「下層のアナキズム 「米騒動」と大杉栄」</p> <p>「自由と生存のメーデー15——反富裕 Life is Scandal」</p> <p>廣瀬純×小泉義之「16年 新年対談 いよいよ面白くなってきた アンダークラスの視座から撃て 前編・後編」</p> <p>廣瀬純「自由と創造のためのレッスン第45回 アンダークラスと「階級構成」」</p> <p>「(書評特集) 長原豊『ヤサグレたちの街頭』」</p> <p>栗原康「村に火をつけ、白痴になれ 伊藤野枝伝」</p>	<p>同右</p> <p>発行：インパクト出版会</p> <p>「週刊金曜日 1059号」掲載</p> <p>「週刊金曜日 1064号」掲載</p> <p>発行：新評論</p> <p>発行：タパブックス</p> <p>発行：角川書店(角川新書)</p> <p>「山谷」制作上映委員会「サイト記事」</p> <p>15年5月メーデー</p> <p>人民新聞オンライン「ピープルズニュース」サイト記事</p> <p>「週刊金曜日 1080号」掲載</p> <p>「情況 16年2・3月号」</p> <p>発行：岩波書店</p>
2016		

2016	<p>対談 廣瀬純×マニユエル・ヤン 「階級構成」とは何か 現代のアンダークラスの闘いとはいかなるものか」</p> <p>自由と生存のメーデー実行委員会「自由と生存のメーデー16——アンダークラスの闘い——山谷、そして歌舞伎町」資料集</p>	<p>「図書新聞 3253号」掲載</p> <p>16年5月メーデー</p>
------	---	--

概念に泥を塗り！——メモランダム

平井玄

(1) 1986年7月、山谷では右翼ヤクザの小組織との闘いから、ひとつの上の金町一家との抗争に運動は進行していた。その緊張した毎日の最中に「労働者派遣法」が施行された。夏の暑い日の早朝5時ごろ、木造モルタルのドヤ2階にある山谷争議団事務所前の路地に集まった防衛隊のミーティングで、ある活動家からそのことを知らされる。ゲバ棒がわりのビニール傘を手に地面にへたり込んだ私は、眠い眼をこすりながらそれを聞いていた。

13種の業務からその年の内に16業務へ、1年を上限とする「人買い」稼業の公然たる法的認知である。それは暗黙のうちに許されていた日雇い労働者の生業が全社会へ広がる始まりだった。そのリアリティをこの時、話してくれたMさんほどに私が感じ取ったとは思えない。ただ、サラリーマンなどいない歓楽街で凌ぐ浮き草のような人間たちを見ながら、日々やせ細る零細家族自営の家で育った私は、そういう生き方が洪水のように押し寄せてくる本能的な直感だけは抱いたと思う。

(2) 1995年5月、日本経営者団体連盟は「新時代

の『日本の経営』とタイトルされた提言を発表する。「今後の雇用形態は、正規従業員のほか、派遣社員、契約社員、パートタイム労働者などいろいろな雇用形態の人たちと共同で仕事をすることになる」とそこにはある。

事実そのとおりになった。いや期待以上になった。統計をめぐる諸官庁の操作を削ぎ落とせば、各種非正規社員類型を合算した割合は首都圏では全労働者の5割を超えているだろう。当時、これに関わった日経連常務理事は「自由な働き方を求める若者たちの要求にも合致する」と考えたという。さらに「景気回復までの緊急避難」「倍にまで増えるとは予想しなかった」とも言う。「いま提言できるなら、非正規を正規に戻していくよう訴えたい」と述べている(2015年1月の「新時代」発表20周年シンポジウムでの発言、東京新聞2016年5月24日)。

(3) 聡明な彼らが80年代に本格化した欧米における新自由主義の展開を知らなかったとは、どうてい思えない。しかしそこに善意の要素がいくらかあったとして、それこそがイデオロギーを駆動する。全共闘時代の三一新書に『やりたいことをやるだけさ』という本がある。新自由主義が1968年の「反転」だった理由である。そして、そのとおりの68年の活動家たちは誰一人例外なくこのことに鈍感だった。私は憤懣やる方なかった。彼らに怒りさえ感じていたと言おう。これは今もなら変わらない。

ブローガー池田信夫はピケティに反論して「日本では階層間格差より世代間格差の方が問題だ」、むしろ「資本

主義が足りない」と、したり顔で書いた。この種の迎合は企業の中では今も主流をなしている。今日（7月4日）もクライアントからのコストカット要求交渉の現場で、40代そこそこの女性管理職の似た発言を聞いたばかりだ。企業は間違はなく「格差是正」など鼻で笑っている。どうぞ勝手に嘆いてください。ピケティも含めて「格差」という言葉にはその程度の重みしかない。「ドレイの言葉」という所以である。

(4) 1986年7月と1995年5月をひと繋ぎりの流れとしてつかむ。

それはどうということか？

私はアジア太平洋戦争の直後に行われた「傾斜生産方式」を思う。それは、1946年に有沢広巳が策定した石炭と鉄鋼のスパイラルな増産によって経済基盤を再生させる緊急体制のことである。戦前に治安維持法で投獄されて共産党から転向し、近衛文磨のブレーン集団「昭和研究会」に属して戦時経済再建案を構想し、さらに陸軍秋丸機関で日米の経済力比較に携わった人物である。戦争による疲弊と戦後鎖国の下で貴重な資源となった石油を鉄鋼生産に集中し、その鉄材を炭鉱地帯に投入する。「石油から石炭へ」という、趨勢に逆行したエネルギー政策が戦後復興を可能にする。

(5) そのアイディアの源泉はマルクスの再生産表式にあり、かつ培養基はアジア規模の戦時経済にある。ワイ

マール期ドイツの右派社民党による経済統制に学んだ岸信介や、満鉄調査部に屯した転向マルクス主義者たちにも同様な発想があった。しかし有沢は「二重構造」という言葉の発案でもある。原子力委員会発足時からのメンバーであり、原発稼働最初期の委員長だった。その意味で有沢広巳は、1920年代にフランクフルト学派の近くでウィットフォーゲルにアジア論を学び、講座派マルクス主義の世界性から大アジア主義の抜け殻に「転進」し、戦後は中国派として共産党圏に舞い戻った平野義太郎の経済版といった方がいい。2人はともに東大新人会の会員だった。

(6) 1949年に傾斜生産政策が終了して数年後にピークを迎えた石炭生産は、10年経たずして炭坑ごと廃棄されていく。炭鉱地帯から再建が進む大都市周辺の寄せ場に労働者たちが流れ込むのである。寄せ場とは、江戸の人足寄せ場の流れを汲む場所とはいえ、戦争経済の産物だった。そして戦後高度成長期の「寄せ場」とは、ポスト傾斜生産時代の産物ではなかったのか。そこから「労働者からフリーターへ」という、1986年から95年に向かう見えないプロセスの原型が浮かび上がらないか？

産業資本主義下の下層肉体労働から電子資本主義下の下層情動労働へという、大きな労働力転換の流れをつくる政策誘導があったと思う。それが「傾斜生産」とその急速な転換を思わせる。それは生産力主義による経済統制が生んだ強制発動のワンシーンである。「寄せ場」を

歴史化し、さらに「フリーター」にその反復を見る。新左翼と全共闘の時代、概念の空中戦に頭が肥大したガキを寄せ場の現実が地面に叩きつけた。家内労働の毎日に鬱屈していた者にとって、日雇いたちの所作の端々が、山岡強一やMさんの何気ない言葉が「私の大学」だったのである。

概念に泥を塗れ！——「階級」への道をまずはそんな風に歩んでみたい。

刊行物案内

生・労働・運動ネット 富山

Z I N E ・ 2 2014・秋

〈フクシマへ〉折り返すことにむけて

Z I N E ・ 3 2015・春

さよなら 私の死者・たち——「困民丸」の小さな歩みから

Z I N E ・ 4 2015・夏

「敗戦／戦後70年」は私・たちの〈問い〉か

——「ラウンドテーブル・2014」での論議から

Z I N E ・ 7 2016・夏

私・たちの来歴

——「日本の構成的解体」の想像力の自立を求めて——

Z I N E ・ 8 2016・夏

「階級」という問題の来歴：資料リスト 00年代から現在

生・労働・運動ネット富山 ZINE・8 - 2016・夏

〒 930-0009 富山市神通町 3 - 5 - 3
TEL : 076-441-7843 Fax : 076-444-6093
URL : <http://net-jammers.net/>
E-mail : jammers@net-jammers.net